ず。世界を宗教的に知るとは、そを實際あるが如くに考へ、しかも決してそを支配する科學的法則に矛盾せずして、靈の生命に關するその價値を定むることにして、そは世界をその靈の生命の發達にいたる手段や、障礙や、もしくは威嚇として評價することなり。同樣に吾人自らを宗教的に知るとは、科學的心理學を建設することならずして、その心理學がまづ建設せられ、しかも適當に建設せられたる上に、吾人は心の統一と平和とに達しうべき爲に、吾人自らをして吾人が苦しむ矛盾を統御せしめ、以て神並びに世界に對する吾人の關係に於いて、吾人自らを理解することなり。斯くの如くにして、宗教的知識は決してその主觀的性質を脱離しえざるのみならず、そは實にその行動に於いて、かつその合法的發展に於いて考へられたる敬虔の情の主觀性そのものにほかならざるなり。これらの二種の知識の內的性質定められたれば、その各はその各自の範圍內に於いて確實にして、兩者相互に相侵すことの正當ならざる事明らかなり。宗教的信仰によりて、實驗的科學もしくは知力的批評論のみひとり判斷しうるあらゆる現象の實在を規定せむと試みること、又は客觀的科學の手段によりて、主觀的意識より生ずる道德的判斷を形成せむと望むこと、これらは二つながら相等しき侵略にして、かつ濫用なり。實驗的科學は宗教的意識が自己を侵さむとするを禁ずる權利を有せども、宗教的意識も亦等しくその眞の限界に對して、科學を制限するの權利を有す。吾人もしこの兩者の間の紛爭を終らしめむとせば、兩者の混雜を防がざるべからず。神を何等かの現象的形式のうちにとぢこむることは、當然迷信もしくは偶像禮拜とよばるべきものにして、精神を外的現象のうちに禁錮し、消散せしめ、而してその宗教的ならびに道德的活動の眞面目なることと價値とを否定することは、これまさに不信仰といはるるものなり。

宗教的並びに道德的範圍の眞理は、パスカルが心情（ハート）とよぶ主觀的のはたらきによりて知らる。科學はこれらの眞理については少しも知らず、そはこの範圍に屬せざればなり。同樣に自然の現象はただ觀察と計算とによりてのみ知らる。心情も宗教的信仰もそれ等に關して決定し能はず。各範圍は何れもその確實性を有す。吾人はその確實性、一に於いては他に於けるより大なりといふこ

とを得ず。科學もその對象に對して確實なること、決して道德的もしくは宗教的信仰がその對象に對するにまされるにはあらざれども、その確實の方法を異にす。科學的確實性はその根據を知力的明白に有す、宗教的確實性はその基礎として主觀的生命もしくは道德的明白の感情を有す。前者は知力に滿足を與ふれども、後者は全精神に秩序の再建及び健康の恢復の感、勢力と平和との感等を與ふ。そは救濟てふことを內に確かむる幸福なる自由の感情なり。

最後に、これらの知識、即ち確實性の二種類が異る方法によりて生じ、且發達することあやしむに足らず。客觀的科學は客觀的論證によりて相傳はる。學者の主觀的生命はそれと關せざるなり。天文學者がその發見の眞なることを吾人に信ぜしむるには、彼善人なるを必とせず。反之、全然不道德なる人は倫理學の教授としては甚だ嫌惡すべきものたらむ。宗教は唯宗教的の人によりて弘布せらる。かつ又宗教的知識に於いては、知力的論證や觀念は、そが主觀の人格的生命の發表及び媒介物たる務めをなす以外には、何等の價値をも有せざるなり。これ雄辯の秘密にして不可思議なる所なり。『我を泣かせむ爲には汝まづ悲しまざるへからず。』(Si vis me flere, do lendum. ホラチウスの言)とは美學に於けるが如く、否更に多く凡ての道德的の教へに於いて眞なり。人は神の存在を客觀的に論證せむと企つることによりて、何等の得る所もなし、かくの如き證明は敬虔の念を有せざる人人にとりては無效にして、そを有する人人にとりては無用の長物なり。眞の宗教的弘布(Propaganda)は內的傳染によりて生ぜらる。『生けるものは生けるものより生る』(Ex vivo vivus nascitur.)。神學に精密なることは、宗教上敬虔の暖みに比してはるかに重要ならず。古來何れの時に於いてもあはれむべきもろもろの論議は、いみじき轉心にともなはれぬ。この點を非難する人人は、決して宗教的信仰の眞髓には到徹せず。

この知識の二種類の間の、明瞭にして截然たる分離を缺くが故に、世には一方に哲學者の倫理學及び哲學を客觀的科學に變形せむと揚言するあれば、他方には科學者の、その客觀的科學を、形而上學としてかつ人生の謎話の解決として稚くも呈出せむとするあり。この二つの妄見、このうちにぞあらゆるものは混合せられ、かつ混雜せらるるなる。客觀的倫理學とは如何なるものと考へ

られむもままなれども、そは倫理學にてはあらず、しかいひうべくんば吾人は丸き四角ともいひ得べけむ。客觀的科學が形而上學に變ずるや、そはもはや科學たることをやめて、主觀的哲學となる。こは言ふをまたず。

しかも吾人はこれらの二種類を差別して、兩者を孤立せしむべからず。殊に又、吾人は兩者の密接なる關係、そのかたく相結合せることや、相適應せることを看過すべからず。主觀は一にしてその統一の明瞭なる意識を有す。これその常に綜合に向ふ所以なり。現象的科學は自我の主觀的意識より、統一計畫及び調和の觀念を借り來るに非れば、完全なること能はず。之と共に道德的及び宗教的意識は、自己を發表せむがためには、その使用する材料を現象的科學より借り來るを要し、而してその結果常にそれらの材料に矛盾する事をさくべきなり。かくの如くにして吾人は不斷の努力と缺損し難き信仰との綜合的調和を求めゆくなり。しかもそれにも拘らず、論理的統一の哲學を斥けむとするなり。吾人は、或は結論により或は適用によりて、客觀的範圍の知識より主觀的範圍のものを演繹するを得となすことを許容することに、あくまでも反抗す。

かくの如きは唯物論的汎神論(Materialistic pantheism)の誤謬なり。又之に反して現象的科學の客觀的範圍の知識は、宗教的もしくは道德的範圍より演繹せらるることを得、かつしかせらるべきなりと爲すことに對しても、同樣にして、これ凡ての獨斷論(Dogmatism)の有する反對の誤謬なり。精神的は單に物理的に還元せられえず。又物理的は全然精神的に還元せらるるを得ず。吾人はそのうちより必要なる發達を生ずる、生命のこの効果ある矛盾を重んぜざるべからず。調和に對する傾向はあれども調和そのものはこれなし。調和は努力に對して約束せられたる報酬、提供せられたる目的なり。吾人の哲學は觀念論的並びに唯物論的思索の如く、實際的にして暫時的なる瞬間を、永久なる形而上學的實在と爲さむと欲するやうのことなく、當に靈的生命をその轉化のうちに、即ちその發達と衝突とのうちに認めざるべからず。

第五節　目的觀。

本質と起原とに於いて主觀的なる宗教的知識は、その進行に於いては目的觀的(Teleological)なり。而してこの第二の特質は第一のものより生ず。

目的觀はあらゆる有機的生命の、而して又、あらゆる意識的活動の形式なり。凡そ道德的知識とは靈性の意識的生命の理論ならずして何ぞ。

因果の原則なくては、現象は科學上連結せられざるべく、目的の觀念若くは傾向の原則なくては、生物的にして心理的なる事實は組織せられざるべし。即ち統治せられざるべし。

器械觀と目的觀と、これらの語は自然の知識と宗教的知識とによりて形成せられたる矛盾に對する二つの新名目なり。されどこの說明の形式の一は、他を排斥してそを無用の長物ならしむと信ずるは偏見なり。吾人は之に反對する實例を人の造りし器械に於いてのみならず、また凡ての生ける有機體のうちに有す。その有機體に於いてはクロオド・ベルナアルに從へば、生命の指導的觀念(Directive idea)は絕對的必至のうちに實現せらるるなり。

現象の機械的說明と科學の必至論とは、そが形而上學的唯物論に變ぜられし時、――即ちそが獨斷的に、かつ主觀的のはたらきによりて、宇宙に於いてはただ物質と物質の運動とあるのみと主張する時、――に於いてのみ、目的觀を排斥せむとはするなり。されど然る時に自ら科學的なりと信ずるその唯物論は哲學となり、そのために他の凡ての哲學のやうに、そが世界に對する客觀的科學のみならず、自我の意識の權限內に屬するにいたるや明らかなり。

原因と目的との觀念は、同一なる根原より生ず。原因の觀念は自我が己を知るや、自らその行動の能動者たることを明らかに感じ、そがなしし、その努力の感によりてこの感を有するが故に、吾人のうちに生じ來る。されどこれと同時に、自我はその己を誘引する目的をめあてに、その努力を爲したることを知るなり。かるが故に、原因と目的とは同一なる意識的行動の二側面なり。一は意識を後ろより見たるものにして、一はその前景なり。吾人は唯世界を吾人の意識の鏡に反映せしめて知るが故に、從つて原因と目的との二個の範疇は、相等しき必然性をもつて吾人の知力に負はさるるなり。

斯くの如き心理的觀察より生ずる他の一の結論あり。自我の意識や一なり、

原因の觀念も目的の觀念も、それのみにては全宇宙を吾人に說明するに足らざるべし。凡そ現象の客觀的科學が完成せられず、又決して完成せられ能はざることは、一見直ちに知り得る所なり。科學が各の現象をそが新しき目としてとりいるるその連鎖は、科學の發達によりて、時間空間のうちに、無限に、しかもいづこにもそを缺く所もなくて、長めらるるなり。空間と時間との外に於いては、因果の原則はただ不可解なる矛盾を生じ出づるのみ。かつや一の現象を他の現象によりて說明する事は、そを自ら又說明を要する一の原因によりて說明することなり。かるが故に、事物の器械的理由は決して充足的なる(Sufficient)理由ならず。そは不充分なる個個の理由の、際限なき連續のみ。科學の網はたとひ微にして堅からむとも、あらゆる實在を蓋ひもせず、又蓋ふことをも得ざるなり。科學がつくる宇宙は地球の如くにして、そは無窮のうちをただよふなり。『主よ大空をよぎり地球はいづこにか行く。』

この疑問に對して答ふるものは、ひとり目的觀あるのみ。しかも宇宙に關する目的觀的主張としいへば、いづれもこれ宗教的の主張なり。科學はひとり成就せられたる事實を研究して、決して現象及びその前行的もしくは並存的條件以外のものを規定せず。現象にして一度因果的連續のうちに整へらるるや、科學の任務は成就せられしなり。更に遙かにゆかむことを科學に求むるは、その限界以外にゆいて、科學そのものの性質を破壞することを求むるなり。吾人は靈の統治てふことを確認することによりてのみ、宇宙に目的觀をおくを得。事物のうちに理由ありといひ、思想ありといふは、――事物は一の目的をもとめて動くといひ、秩序や調和や善を實現すといふは、――これ物質の靈に從ふをいふなり。この靈の主權を主張することは、予が最初に語りし、その根本的なる宗教的信仰の活らきをなすことにして、そは人そのものうちに、又世界のうちに、物質以外のもの即ち靈の深秘的なる能を感ずることなり。避くべからざるが故に正當なるこの信仰の活らきは、科學の客觀的範圍に屬せずして、宗教的生命の主觀的範圍に屬す。

目的觀と終局原因(Final cause)の說とは、兩者の特質誤解せられたるが故に排斥せられ、現象の說明に於ける器械的原因に、時には同一視せられ、時には

代へ用ゐられたり。超自然的なる計畫即ち神の意志に訴ふることを以て、未知なる科學的說明に代らしむることなされぬ。學者等がこれに反抗するは正當なり。萬物の終局原因たる神は、何物に對する科學的說明にてもあらず。科學の目的は第二原因を求むることにして、第二原因發現せざる處には科學は存在せず。それに代るものは信仰なり。神世界を創れりといひ、世界は至善にむかひゆくといふは、實證的科學を一歩も進歩せしめず。これに對して、雨や雷や物體墜落の現象を說明するは、神話的概念を消滅せしむべきも、それは宇宙の機巧には目的ありといひ、引力の法則及び物質の勢力は、その知らざる而してそれらのもの以上の價値ある、目的の爲に活らけりといふ、靈の宗教的確認を壓倒するにはあらざるなり。

科學の發見と宗教的及び道德的生命の「規矩」(Postulate)との間には、常に一歩ごとに破壞せらるれども、而かも前よりも益益高く益益大きく進歩しゆく、一の綜合必ず形成せらる。機巧そのものは合理的ならむ爲に、目的觀を求むるなり。物質世界てふ本文は靈がそれに與ふる解釋を期待す。科學はその發見によりて本文を設定す。この嚴密なる本文の設定なくては、意識の註釋は空想たるのみ。しかもその註釋なくては本文そのものは何物をも示さず。それは殆んど存在せざりしものの如し。

而して又、目的觀を宗教的意識の眞髓となす他の一の理由なる實際的理由あり。吾人は決して、吾人が宗教に於いてかつ宗教によりて求むるところのものは、生命の謎に對する鍵なりとの事實を看過すべからず。宗教的の見地よりすれば、宇宙の謎はただ吾人を惱ましむ。所以如何といふに、吾人はその謎のうちにその秘密の存することを信ずればなり。吾人は船に乘れり。而して吾人は吾人の運命は船そのものの運命に依れることを明瞭に知る。これ宗教的信仰がその船の建築術やその構造の手段方法に關しては全然關知せずして、專らその帆をあぐる方向に注意し、そのたどりゆく道を發見せむと求むる所以なり。それは羅針盤を有するか。而して何人か船機をとる人のあるありや。

換言すれば宗教的本能とは、自然の永久なる威嚇に對して靈が自己を護らざるをえざる切實なる要求なり。信仰は萬物を最上善の見地より判斷し、而し

て靈にとりては最上善のみひとり、靈の生命の終局的にして完全なる發展たるを得るなり。かるが故に、宗教的概念としいへば、いかなるものに於いても、決してその根柢に目的論的判斷以外のものを有せざるなり。宗教的信仰を利するところのものは、事物の本質にてはあらずして、その相互的價値とその組織となり。神の宗教的概念に最も與ふること大なるものは、その形而上學的性質にはあらずして、人間に關する神の意志なり。而して世界の宗教的概念に於いては、そは現象の機械的原因にあらずして、そは世界はいづこに向ふか、そは靈の劇場たり且機關たる以外に、他の何等かの目的を有するかてふことを知るにあり。吾人の信仰が、神を永久にして全能なる靈なりとなす時に、信仰そのものが言はむと欲する所は、人は自己の個人的靈の、自己自らの如き靈的勢力以外のものには依存せざることを主張せむと要求す、といふことならで何事なるべき。實にこの世界の究極の原因を定むることは、又その第一原因を定むることとなり。これ同一事物を異る言葉にていへることにして、實に形而上學をその語の語原上の意味にて組成することとなり。主要なる點は見うべき現象の連鎖以上に、かく終局的に立ちいづることは、そが哲學者によりてなさるとも、或は神學者によりてなさるとも、常に主觀的生命の活らき、靈の確認、信仰の活らきにして、科學の論證ならざることを知ることとなり。

第六節　象徵說。

第三に而して最後に、宗教的知識は象徵的(Symbolical)なり。その作りかつ組織するあらゆる概念は、宗教的感情によりてつくられたる最初の隱喩より最も抽象的なる神學的考察に至るまて、その對象に必然的に適當せず。彼等は精確なる科學に於けるが如く、決して同格ならず。

その理由は發見すること容易なり。宗教の對象は超越的にしてそは現象ならず。而してよそ事物を言ひ表はさむがためには、吾人の想像は現象的映象(Phenomenal images)以外に何物をも用ゐるをえず。吾人の悟性は空間時間以上にゆきえざる論理的範疇を有するのみ。かるが故に、宗教的知識は見えざるもの

を見得るものにて言ひ表はし、永久なるものを時間的のものにて、靈的の實在を感覺しうる物像映像にて言ひ表はさざるべからず。そはただ譬喩に於いて語り得るのみ。宗教的知識の理論は、そを完結せしむるために象徴の理論即ち象徴説を要す。

象徴とは何ぞや。見うべからざる靈的のものを、感覺しうべくして物的なるものを以て言ひ表すこと、――かくの如きはその主要なる特質にして、かつその根本的の官能なり。そは生ける有機體にして、それに於いて吾人は現象と實體とを差別せざるべからず。そは身體に於ける精神なり。身體はたとひ精神と類似せずといへども精神が發現にして、そは精神をして活らかしめかつ實現せしむ。この點に於ける象徴の最も完全なる例は、思想の二つの具現たる言語と文字とのうちに見るを得。わが筆によりて書かれたる文字も、わが喉頭に於ける空氣によりて爲さるる聲も、いづれもわが思想と積極的なる類似を有せず。されど是等の文字や音聲は、それらを解し得る人人にとりては記號となる。これらのものは感觸し難き思想てふものを言ひ表はし、そを讀み或は聽く人人の精神に現はれしめかつ活かしむ。

こは藝術の創作に於いて一層眞實なり。藝術は理想を現實の裡に宿し、物的形式によりて、言ひ表はし難きものを言ひ表さむとする努力なりとして定義せられたるべし。これ創造を意味するポエジイ(Poesy)てふ言葉によりて明らかにをしへらるる所、大藝術家の作物は眞に生けり。所以如何といふに、そは精神を有し豐かに強き生命を有せばなり。而してそをば、その物的形式は隱すと與に啓はすなり。建築術より音樂に至るまで、象徴的ならぬ藝術あるなし。倫理學といひ宗教といひ靈の主觀的生命に關するあらゆる教へは、何れもただこの發展の手段を有するのみ。外的に且客觀的になり、而して科學が研究する外的事物を支配するに至るは、これそれらの教への特質なり。象徴は靈の勝利と偉大なることとを表明すること、はるか科學にすぐれたり。科學自然を啓はさば、象徴は自然及びその變態とその法則とを、靈の内的生命の光榮ある像となすなり。

藝術家の精神のうちにして、その自我の主觀的活動より生れたれば、象徴

は純粹なる知力に語るよりは、寧ろそを思ふ人人の內的生命に、即ち感情に語ること多し。そは自我の主觀的活動を覺めしめかつ活かしむ。そは吾人のうちに、詩人その人がそを生ずることに於いて經驗したる感情や、いひしらぬ樂しびや、感激や、信仰を生ぜしむることに於いて、その努力のかぎりを爲し終へしなり。斯くの如きは藝術の魔術("The magic of art")や、雄辯や、宗教的インスピレエションの根原にして說明なり。生ける象徵を作る人人は、皆その精神を吾人の精神に、その生命を吾人の生命にそぞぐなり。彼等は吾人を從へ、吾人を恍惚たらしむ。學問的概念によりてよりも象徵によりて、一層よく靈の交りと團體とは實現せられ、而して精神の集合的意識、即ちあらゆる個人的精神を包含してそを調和にいたらしむる意識、國民教會人類の意識は生ぜらる。世界を支配するものは學問にあらずしてそは象徵なり。

論理的明析に於いてこそ科學の觀念に劣れ。力と範圍とに於いては、象徵それらにまされり。科學はしひて事物の表面にとどめられ、宇宙間に絕えず生ずる現象に止めらる。科學に於いては勢力の根本も發見せられず、從つて又生命の秘密や吾人の運命を解くの鍵も發見せられず。吾人は吾人の行動の意味と目的とを求め、生くることに對する十分の理由を求む。しかも吾人は、これを現象の科學に求むることの矛盾なるを感せざるか。嚴密なる科學的見解よりせば、現象はそのもののうちに自己の存在の理由を有せざることは、吾人の知る所にあらずや。吾人の求むる所現象以外にあり。而して吾人をしてそを理解せしめざれども、しかもそを吾人に啓はすを得るものは、ひとり象徵あるのみ。

自然は藝術に於いてかつ宗教に於いて、靈の內的生命とその健全なる發展との不斷の象徵たるをうべきが故に、——そは、靈によりてこの永久にして光榮ある變態をなすをうるが故に、——吾人は自然の法則と意識的生命の法則との內的交通を許さず、かつそれらの深遠なる一致を信ぜざらむとするもそは不可能なり。象徵的創造物を、支配し鼓吹する所のものは、實に秘密なるかつ力强き類似なり。藝術と宗教とは習慣以上のものにして、そは靈のうちに同時に自然のうちに潛在せる所のものの發現、實在そのものの根本の發現、物的宇宙及び道德的宇宙の發展のうちに並行的に現はるる絕對的勢能 (Absolute energy) の發現

なり。あらゆる事物は何等かの深秘をおほひ、現象はただ外被なるのみ。これ現象がその運命そのものによりて象徴となる所以なり。

象徴の觀念と深秘の觀念とは相互に關係す。象徴について語るは同時に隱秘と啓示とについて語るなり。現はれてかつ感知しうべくなりてすらも、なほ生ける本眞は依然として被はれてあり。心情にとりては生きたる眞理を啓はすものたるその同一なる譬喩も、智力にとりては依然として通過しうべからざる墻壁たり。人はかの詩人が無限の感についていひし所をここにいひ得るなり。その言に曰く、『吾人はそを見れども悟りがたきが故に不安なり。』と。

この不安の念は、その生ずる原因を明らかにする事によりて和らげらる。象徴とは宗教に適したる唯一の言語なり。吾人は崇拜する所のものを知ることを求む。何人も少しも知覺せざるものを崇拜せざればなり。しかも吾人がそを了得せざるべきことも、又等しく必要なり。人は餘り明瞭に了得する所のものを崇拜せず。了得すとは支配することなればなり。斯くの如きは敬虔の二重にして相反せる條件にして、象徴はこれに答へむために表はさるるものの如し。

敬虔の情は、未だかつてその外に何等の言語をも有せざりしなり。

この種の考察のうちに、當初に於いて宗教と藝術とを結合するきづなに對する說明を認めうべし。されど、吾人は吾人が特種の題目にとどまり。而して進んで、宗教的象徴の生命と力とを成立する所のものは何なるかを計究せざるべからず。

宗教的象徴は神をさながらに現はすと信じ、かるが故にその價値は一にその神を現はして精確なることに存すと爲すは謬見なるべし。象徴の眞の內容は全然主觀的にして、そは神に對する主觀の意識的關係なり。否寧ろそは神によりて影響せられたりと思ふ感じ方なり。されば舊約の詩人が『主はわが巖なり。』(詩編。第十八編、二節。)と叫び、また『神はやき盡くす火なり。』(申命記。第四章、二十四節。)と叫ぶときに、基督が吾人に『我らが父よ。』と言ふことを敎ふる時に、是等は神の學問的なる、而してこの場合形而上學的なる定義にはあらず。これ等の譬喩がただ傳ふる所は、絕對の信頼や恐畏や親子の愛の關係にして、これ神の靈がその深秘的なる活らきによりて、人の靈のうちに現はれてつくりいづるものなり。

これらのくさぐさの感情よりぞ、自らに、そを傳ふる強くして單純なる譬喩は生ずるなる。而してこれらのものは、もしその主觀的經驗にして除き去られたらむか、何等の內容もなく何等の眞理をも有せざるなり。

この見地よりして、吾人は宗教的インスピレエションは心理上何に於いて成立するかを知るべし。その目的とその結果とのいづれに於いても、そは人にその性質上學問的方法によりて知る可らざるものに、精確なる客觀的なる既成の觀念を傳ふることにはあらずして、その主觀の內的生命を豐かにし高むることに於いて成り立つ。そはその主觀の內部の宗教的活動を活らかしむ。けだし神はそのうちに現はるればなり。そは神の人に於ける新しき具體的なる關係を組成する、新しき感情を興奮せしむ。而してこの創造的活動の事實によりて、そは人の靈の內的生命のうちに於ける神の靈のこの啓示を以て精密にその內容とせる、新譬喩新象徴を自發的に生じ出だす。

宗教界に於ける最も偉大なる啓導者は、象徴の最も偉大なる創作家なりき。豫言はその語の聖書的意味に於いては、神の啓示を與ふるに未だかつて譬喩以外の形式にてせざりき。而してこれらの譬喩は、豫言者の宗教的生命が高められて自然的に外部に現はるることよりならでいづこよりか生ずべき。インスピレエションのあらゆる他の概念は反心理的なり。

何處よりか象徴の生命と力とは來る。この疑問に對して吾人は答ふらく、敬虔の感情と最初にそを意識に飜譯する譬喩との、最初の有機的統一よりなりと。そは精神と身體との有機的統一なり。象徴を生ずる創造力偉大なるにつれて、この統一は益益强固なり。そはその生命をなすが故にその眞理をなす。象徴に於いてはそが生存せむ爲には眞面目なることにて足れり。感情譬喩より分離せられず、譬喩感情より分離せられざることにて足れり。『主はわが巖なり。』との神に對するこの信頼の叫びに對しては、この信頼の情がまことに感ぜらるる限り、たとひ巖は神のまづしき譬喩なりとはいへ、何等の反對も存せざるなり。從つて象徴の價値は、用ゐられたる譬喩の性質によりて計られずして、感情てふ段階に於いて吾人を神につなぐ、その關係の道德的價値によりて計られざるべからず。宗教の深奥なる價値をひとり形ちづくり、而して吾人人類の發

展に於けるその眞の位置を宗教に歸せしむるものは、この關係の道德的價値なり。

然りといへども、譬喩がそを生じたる感情より分離して、記憶のうちに固定する時は來る。譬喩をそれ自らに於いて考ふる事に於いて、吾人の考察はそを變形して多少抽象的なる觀念となし、而してこの觀念を宗教の對象を表はすものなりとなす。されどここに、吾人が當初に、超越的なる宗教の對象と吾人がよつて以てそを表はさむとする現象的譬喩の性質との間に注意せし。根本的なる不調和は生ず。ここに於いてか凡ての象徴的觀念のうちには、潜める矛盾あり。この矛盾より脱せむとて　知力はこれらの觀念よりそのうちに殘り存して、そをしてその對象に不適當ならしむる感覺的の要素を除き去らざるべからず。

普遍化し抽象化しゆく活らきによりて、推理力は原始的なる隱喩を稀薄にし、そをひきうすの上においての如くすりへらすなり。されどその隱喩的要素消滅したらむには、その概念そのものは、そが積極的概念たる限り消えうす。

そは雪花石膏の球のもとに於いてのみ燃ゆる、不可思議なる燈火なり。吾人はそをして一層透明ならしめむが爲に、その堅きおほひをけづり去ることを得。しかも吾人はそを破らざらむことを注意せざるべからず。破られたらむには、內なる炎は消えさりて、吾人を暗中に殘すべければなり。

宗教の對象に關するあらゆる吾人の一般觀念に於いても然り。各の隱喩的要素にしてそれらの觀念より除き去られたらむか。そは單に消極的に矛盾的なるものとなり、而してあらゆる眞の內容を失ふ。もし吾人それらのものに積極的の內容を與へむと欲せば、吾人はそれらに積極的經驗の何等かの要素を入れざるべからず。これ神は事物の究極の力なりといひ、神は萬物の創造的原因なりといひ、神は正義なり、神は靈なり、法官なり、父なりといふ時に爲さるるなり。

かるが故に、宗教の原始的象徴より生れいでたるあらゆる吾人の宗教的觀念は、必ずやその象徴的特質を終局まで保存すべし。たねの如く植物もあり。教義學そのものは宗教的精神に對しては、高等なる象徴、――即ち活動的にして

生ける信仰の內的發現なくては無價値なるべき形式――に外ならず。もし敎義が信仰を保持し、かつ作り出しうるならば、その初めに於いて敎義をつくり、而して爾來そを革新するものは信仰なりといふこと更に一層眞理なり。

多くの善良なる人人は、宗敎的知識とその心理的起原との嚴密なる分析より來れるこれらの結論に反抗す。彼等曰く、汝の言正當にして、吾人の靈性の心的組織は、宗敎的思想を象徵的形式のうちに限定することを假定すとも、超自然的啓示の吾人をしてこれらの限界以上に出てしめ、吾人にその對象に適當なる宗敎的觀念をもたらし、その結果純粹にして絕對的なる眞理をもたらしうるものあらざるかと。こは吾人にとりては甚だ奇なる――神の啓示が知識の條件よりはなれて、即ちそがそれによりてひとり吾人に近づきうる形式よりはなれて功果あるべしとの、――願望なりと思はる。彼等は啓示の觀念そのものが速かに矛盾的のものとなることを見ざるか。神にして吾人がうけうべき贈物を吾人に與へむと欲せしならば、神はそのものの形式を吾人の心の形式にかなはしめざるべきか。彼は彼の恩惠の性質を吾人に說明せむために、彼自ら吾人の觀念や吾人の言語を利用せざるべきか。吾人の觀念にして時間空間以外に移されたらむには、ただちに相矛盾して自ら滅亡するや確實なり。而して吾人が見うべからざる永遠なる事物を、實際的なるかつ人間的なる譬喩によりて、認め言ひ表はすことの必要に立至らざるを得ざるや確實なり。もしも神その深秘を吾人に語るに、これらの人間的手段以外の他のものを用ゐたらむには、吾人は毫も彼を理解せざるべく、ために啓示はもはや啓示ならざるべし。而して神が己を人に現はさむと欲せし時に、彼は決してその機關として、人以外のものを用ゐざりしこと、及び吾人が神の子とよぶその人が、神の王國の事を決して譬喩ならでは語らざりしことは、この理由のためならずや。

何人も實に基督ばかり、この象徵的形式を好みし人なく、また彼ばかりそを聰明に好まざりき。基督は決してその他の形式を用ゐむと欲せざりしなり。かく象徵的形式に重きをおきしことは、世人が想像するが如く、ただ彼がそを自己をあらゆる人人に適應せしむる通俗的のよき手段なりと認めし事實のみよりおこりしならず。彼は又敬虔の道德的危急に對して、如何なる言語も象徵に

比して一層自然ならず、一層適當ならぬことを知りぬ。彼はそのうちに、神自らによりて定められたる機關を見たり。而してこれ眞理なり。譬喩は純粹なる知力にならて、自我の活動的能力に即ち心情に言ひかく。そは吾人の主觀的生命に訴へてそを滿足せしむるに先立つて、宗教的必要を呼びさます。そを聞く精神は冥想し、而してその含める活ける內容を經驗す、これに反して活動せず死せる精神は、象徵のうちに何物をも見出さずして、それより理論的にすら何物をも受領せず。かるが故に、あるものにとりては輝ける啓示もあるものには力なき空しき文字たるにとどまるとは、さながらに眞理なり。常識にとりてはしかく矛盾的なれども、經驗あり信仰ある人の目には、しかく豐かにしてしかく正しき、『持てるものには與へられてなほ餘りあり。持たぬものはその持てるものをも取らるるなり。』(馬太傳第十三章十二節。)との耶蘇が言葉を了解することの可能なるは、ひとりこの見解よりしてなり。神の贈物はただ必要を感ずるものに來り、人の能動的なる願望に對して來るなり。

第七節　結論。

敘述せられし凡ての事よりの結論は、宗教的知識は、人間の生命及び思想のあらゆる發見を支配する變態の法則に從ふといふことなり。

宗教の對象とその發表の手段との間には、不平均あり不權衡あるが故に、宗教のあらゆる創造に於いて、その形式と實質と、形體と精神とを差別することは、常に可能にしてかつ必要なるべし。かるが故に、宗教的象徵は常に實際上頗る變化的なれども、權利上新しき解釋に從ふべきなり。

然りといへどもこの「變化性」(Variability)は無制限にてはあらず。そは理論的に定義することとそ容易ならざれども、決して精細にして確實なることを失はざる限界のうちに限らる。所以如何といふに、凡そ大なる宗教的創造は有機體にして、有機體は自らの性質によりて定められたる、その變態(Metamorphoses)の精確なる能力を有すればなり。

各の生ける有機體に於いては、質に固定の原則と運動の原則とあり。人類

の同一性は、人が受くる凡ての內的及び外的の變形を通じて固執せり。民族の言語に於いてしかり。各の歷史的宗教に於いてもまた然り。その根本的にして統治的なる原則は、そが精神と神との間に設定する關係なり。この原則の形式もしくは外的實現は、疑ひもなく、人種や地理的周圍や歷史的時期に依存す。そはかるが故に、これらの事情に應じて變化すべし。然れども宗教的模型や、有機的生命の根本は依然として同一なるが故に、この宗教はその教義や儀式や象徵を通じて同一なるものとして現はるべし。これ宗教の生命の條件そのものなり。屈曲しえざる形式や、その淸新にして生ける解釋すでに盡きはてし象徵や、もはや何等の外的要素を消化もせず、除去もせざる頑なる體は、不孕並びに死の狀態を現はすものにして、これにつづく所は速かなる破滅なり。

敬虔なる人人は、かたくその敬虔の根本義の固定性に執着することに於いては正し。しかも彼等は、當然その宗教に於ける形式と觀念との革新に對しても、しかく堅固に執着せざるべからず。所以如何といふに、これ彼等の至寶がその價値を保有し、而して彼等の宗教的根本義がその組織的効能を保有せる、唯一の證據なればなり。宗教の生命はこの適應と革新との力によりて測定せらる。もし基皆教が普遍的にして永久的なる宗教ならば、そはこの點に關するその力無限なるが故なり。

終に臨んで、予は二個の誤解を防がむとせざるべからず。教義に於いて宗教的實質と知的形式とを差別せざるべからずと言ひきとて、予は吾人がこの兩者を相互に分離し得ることをも、又しかせざるべからざることをも、又吾人が兩者を分離して有することを得と思ふことをも、意味せず。敬虔の情はその言葉に、即ち知力的の映像に具現する時にのみ吾人に意識せられ、かつ他人に認めらるるなり。教理なき宗教、思想なき敬虔、發表なき感情、これらは根本的に矛盾せるものなり。純粹なる敬虔をとらへむと願ふことは、哲學上物そのものを定義せむと求むるが如く無益なり。吾人が內的なる宗教的事實について、即ち敬虔上の經驗について語る時に、吾人は自らのままなる經驗については語らず。吾人は定まれる從つて明らかなる形にいひあらはされたる經驗なる意識せられたる心理的現象について語るなり。

第二に宗教的科學に關していはむに、そは孤立せる經驗、即ち單獨なる個人の經驗の問題にはあらず、かくてはその材料あまりに定めなく、その觀察の範圍あまりに限られたるべし。この問題は個人的生命の連續とその歴史的發展に於いて考へられたる宗教社會の生命とに關す。

宗教がその根本義を客觀的に實現し、その內的精神を發現し、而してその凡ての力を發展するは、社會的普遍的事實に於いて多く、個人的事實に於いてよりも、種族の社會的生命に於いて、組織せられたる宗教的社會に於いて、その社會の制度に於いて、その共通の崇拜物に於いて、その教會儀式に於いて、その信仰及び訓練の規則に於いて一層多し。宗教が科學的研究の對象となるをえて、そが說明を必要とするはただ、社會的發現としてのみ。かつや個人的意識のうちにかくれて存し、己を他に傳へず、何等の靈性的結合をも何等の精神の團體をも作りいでざる宗教的生命は、恰かも存せざりしものの如く、そは人類種族に於いてと同じく、個個の人そのものにも何等の効果をも與へざる、感情の贅物たるのみ、はかなき詩歌的の花なるのみ。

これらの考察よりして一の研究方法は生ず。宗教的知識の教義的研究は、その歴史的紀念物のうちに固定せられ、保存せられ、且發展せしめられたる、宗教社會の傳統をその題目として有すべし。そはその傳統を象徴的見解より、教會及びその信仰の內的生命の客觀的發現として考ふべし。かくて傳統は死せる動かざるものとしてならで、吾人自らの裏に連續する力として現はるべし。この精神をその効果ある連續のうちに、幷びに外的組織のたえず新なるうちにとらふること、そをその生ける統一のうちに了得すること、教義の起原とその極みなき變形との物語を、そのうちに現はるる根本義の不斷にして必要的なる具現として語ること、この間斷なき連鎖を歴史にたどりて、そを吾人自らの生命にひきのばすこと、――かくの如きは批評的にして同時に歴史を重んじ、保守的にして發達的に、敬虔上に確實にして常に科學に柔順なる、研究方法なり。これ批評的象徴主義が、吾人をしてあらゆる宗教的創造に應用せしむる所のものなり。

正教主義とよばるる宗教的知識のその形式の誤謬は、あらゆる教理の、歴

史的に及び心理的に制約せられたることを忘れて、時間のうちに生じて時間のうちに生きむがために、必然的に自ら變形せざるべからざるものを、絶對にひきあげむとのぞむことにあり。觀念の潮流や、精神の運動に抗するの力なくして、そはただその規則を政治的方法によりて、民法の如く制定せられ適應せられたる規定――法王、司教及び會議の決議や、異端者に對する裁判や、教義的法廷等、――によりて設定し能ふなり。正教主義はその信仰告白をなほシムボル(象徴、信條)とは名づくれども、しかもその象徴的性質の意味をば失ひぬ。その不幸とその缺陷とは反歴史的なることなり。

正教主義の同胞にして同時に敵なる主理說の誤謬は、同性質なり。しかもそは相反せる意味に於いて生ぜらる。そは傳統的教義及び象徴の不完全にして定めなき性質を看過せずして、そを誇大す。しかもそは、それらのものの特別なる宗教的內容を看過す。正教主義は宗教の形體の性質について誤り、主理說はその精神性質に關して誤る。そは古き傳統的觀念のもとに、他の觀念即ち感覺的要素に關係なき道德的もしくは合理的觀念を求め、そを誤つて宗教の本質とす。そは教義に代ふるに、一層單純なりと思はるる他の教義を以てし、而してそを絶對的眞理なりと認む。されど宗教に合理的もしくは教理的內容を與へて、そはその眞の內容即ち特別なる宗教的經驗を空しくす。そは信仰を殺す。蓋そはもはや自己の對象を有せざるが故に、存在の理由を有せざればなり。そは象徴及び宗教的創造を好まざること正教主義に勝れり。それらのものを了得し、かつその結果解釋するが如きは、主理說にとりて根本的に不可能なり。主理說の主なる缺點とわざはひとは、非宗教的なることにあり。

吾人がその大要をたどりたる、批評的象徴主義の學說は、この古き對峙より吾人を脫せしむべし。そは吾人に示すに、象徴的觀念によりて保有せられたる眞理の種類と合法性とを以てし、しかもそれらの形式とそれらの發現とを支配する、心理的並びに歴史的の必至論を無視することなし。かくの如き見地より、宗教に於ける凡てのものは流動的に不定的になれりと、――宗教に於いては何物も確固として不變のものなしと、――想像すべからず。その生命の發達に於いて、人はその靈性を實現し、以て、宗教的及び道德的理想を裏に實現する、

パウロが所謂「基督の大いさ」(Stature of Christ 以弗所書。第四章、十三節。)に達すべき本分あり。この道德的の大いさこそは、全實在中最も高尚なる實在なれ。吾人は絶え間なくそれに向つて進む。而して吾人の內的生命の各瞬間の價値は、そがこの最高の目的に向うてなす發達の度によりて計らる。この內的生命に對しては、それ故に、命令的必然性を以て意識にのぞむ規範てふものあり。而してその結果、他の象徵に對する關係に於いて、健全かつ規範的なる宗敎的象徵は存すべし。それらのものこそは基督敎的生命のこの理想的目的か、もしくは精神が、その目的に達する爲に通過すべき必要なる若干の條件かのいづれかを、完全なる單純と適宜とを以てあらはすもろもろの象徵なれ。例へば、天父、神の國、新生、聖靈にみたさるること、といふが如き、即ちこれらの象徵にして、こは人類の靈的生命の存在せむかぎり、何人もその消滅することを認め能はざる、吾人の宗敎的生命とその起原と、その發達及びその目的としかく親密に結合せり。吾人の意識に直接に與へらるる、基督が專ら宗敎的なる言葉の限りは、この種のものなり。而して彼が、如何なる時勢に於いても誤らず、『天地は廢せむ、されどわが言葉は廢せざるべし。』(馬可傳。第十三章、三十一節。)といひ得るものは、これらの象徵のことなり。

他方にまた、吾人が象徵に於いて實質と形式との間になしたる差別を無視することは等しく不可能なり。而してこの差別は批評に面せり。基督敎徒の最も保守的なるものは、人はその宗敎的內容をとり用ゐることなくて敎理に附着しうべきことを、即ち人人は敬虔ならざるも正敎的なりうべきことを告白す。かるが故に、彼等は象徵(信條)のあまたの內容を同化することを以てその敎會の客員の義務なりとす。されど、傳來の形式を批評的に說明するにいたる權利をゆるすことなくして、如何にして個人的同化の義務を負はしめうべき。己が內的なる宗敎的意識を、その一般の修養と調和せしむとするは、これ凡ての信仰にとりて心理的に必然なることならずや。これらの綜合と和解とが、生命と知識との不斷の發展の故に、必然的に動搖して定まらざるが如しとも何ぞ。人が歩める時に、彼の平衡は一歩ごとに破られては再び定められるるにあらずや。これぞ歩行の狀態そのものなる。

斯くの如く個人のうちに平和を作す象徴主義は、また宗教的社會のうちにそを生ずべし。加特力教に於いては、教會の統一はひとり「中央的無上權」(Central infallible authority)によりて、而して政治的手段によりて保持せらる。その權威は沈默を命ずるとによりて平和を生ず。教義はただ何人もそれに自ら與らざるが故にのみ存在を保つ。新教の團體は同一なる方法によりてその統一を維持するを得べきか。加特力的方法は、新教の團體をしてその生命と思想と切實になるにつれて、益益おほく分派を生ぜしめ、ためにつひには滅亡せざるを得ざらしむ。象徴主義の説ははるかにいみじき結果を提供す。そは新教の團體として傳統的象徴に對する尊敬の念に結合するに、靈の完全なる獨立てふことを以てせしむ。而してこは、その信者らに、おのが責任として象徴を同化し己が經驗にそを適用すべき權利を與ふることによつてなす所なり。彼らはそのうちに、おのが宗教的信仰の要せし所のものを發見しうるが故に、益益誠實に益益熱心に傳統を護る。傳統は補助にして枷にあらず。人人はそを愛すべく、そを時代と時代との間の鎖として、家族の相續產として、各種族各時世の及び學問的文化の各狀態の人人の精神が、相會しかつ相混じ相交はるその場所として、保護すべきなり。

宗教哲學概論畢

附錄

批評に答ふ。

擱筆に先立つて、思ふに予は一二の駁論に答ふるの義務あるべし。

予に寄せられたる第一の非難は、「自然的進化主義(Naturalistic Evolutionism)」てふ語のうちに含めらる。かくて、宇宙に對して多少唯物論的なる概念予に歸せらる。これに從へば、予はハアバアト・スペンサアの如く、萬物を進化といふ單一の法則によりて說明するものにして、而して予が道德界の法則を物理界の法則の單なる變形と爲すが故に、やがては予は、前者を後者に還元すべきなりとせらる。予はこはわが思想の正反對なりと言ふの必要ありや。予が進化てふ語を好んで用ゐて、凡ての現象をその自然の連續として考ふるは眞實なり。されどこは形而上學的學理にはあらずして、研究の過程なり。あらゆる事實をその現はるる如く觀察し、而してそをその秩序に於いて、即ちそが現はるる狀態に於いて、――所以如何といふに、事實はただその秩序及び連續のうちにのみその眞

理と價値とを有すればなり。――觀察する、これらの二つの本來の規則より成立する研究方法なり。地球上に道德的生活は、徐徐としてかつ苦しみおほく有機的生活より生ず。さりとて吾人は、前者のうちには後者のうちにおける以上のものなきこと、而して兩者その價値等しきことを結論せざるべからざるか、決して然らず。現象のこれらの兩種類は、相關係し相連續せざるべからず。しかも予が以て兩現象を知るその研究法は、もはや予にそれらの現象を分離する權利を與へざるとともに、そを混淆する權利を與へず。その類似を忘るる權利を與へざるとともに、その差別を無視する權利を與へず。之に反して、そは予に示すに、兩者の間に進歩あり、一より他に至る眞の發展あるとを以てす。第一のものに始まるものは第二のものに終ることを以てす。一種の生けるかつ連續せる創造ありて、その各階段各程度ごとに、新たなる富と新たなる榮光とを啓はすことを以てす。こは全然予が宗教哲學の根據なり。かるが故に、世界の實在を否定することに就いて、予を非難せむとせば、とにかく、神聖なる創造者のたえまなき行動といふこととよりも、以上の根據以上の口實あるべきなり。

げにこの非難は他の一の非難に伴はざるを得ざりき。兩者はそを和解するの勞をとらざりし人人によりて、予に寄せられぬ。即ち明らかに相矛盾せる汎神論の非難は、自然的進化の非難に附加せられたり。予は多かれ少なかれ、かのすべてなるにあらざれば皆無なりと考ふべき第一原因、即ち實體てふものの流動及び變形をば冥想せむがために、第二原因の實在を無にせむとする、ヘエゲルぶりの觀念論に盲從せる學徒なるが如く思はれぬ。されどここに於いてもまた難者らは予がとれる研究方法の性質を看過せるなり。その研究方法は予を導いてわが意識の裡に、予自らなる特種の原因と神なる一般原因との深秘不可思議にして眞實なる共存を發見せしむ。予はくりかへし言ふ。そは分析こそ爲しうべからざれ、しかも自ら計りて己が生命の窮極の底ひに至る凡ての人によりて、否定せられ難き深秘なりと。これそのうちより宗教が見うべからざる必然性によりて生じ出づる深秘なり。而してこの深秘は予によりて研究の當初において提言せられ、かつその終局まで維持せられたるが故に、人人はいかにして互ひに相助けなすこれらの二つのものの一つを、犧牲にすることを以て正當

に予を非難しうべき。――その結果は第一に宗教の心理的起原に關するわが說を消滅せしめ、且不可能ならしむるなり。シャアル・セクレタン(Charles Secretan, 1815-1895.瑞西の哲學者にしてロオザンヌに哲學の教授たりし人。)は言ひぬ。『予のうちに予よりさらに大なるものの生ける、あり。』と。――これ一人の深秘不可思議なる客にして、そが普遍的永久的なる行動をば、予は予が經驗的活動の種種雜多なる現象のもとに感じ、予は予が全生命を彼に歸するがごとく、予が善なる時に、信賴せる時に、謙讓にして勇敢なる時に、つねに予の善なること、予の信仰、予の勇氣、予の謙讓を歸するなり。

予は有限と無限との并存をば理解じえず、しかもこの二元は到るところにあり。予は物理界に於いても道德界に於けるごとく、あらゆる現象のうちに一種の潛勢力なる隱れたる力ありて、そはその現象を高めて、それ以上にゆかしむることを觀察す。自然は永久なる轉化なり。即ち永久なる產出なり。太陽のもとに新なるものなしといひ、未來はただ過去を反覆せざるべからずといふは眞理ならず。創造は未だ決して完成せられざるなり。耶蘇は言ひぬ。『我父は今にいたるまで働き給ふ。』(約翰傳第五章、十七節)しかもわれらは如何なるものなるべきかは未だ知られざるなりと。されど予が神の仕事に對するいささかなる知識も、その發達的なること、その一歩ごとに人生を高めかつ富ますこと、而してこの發達は予が理性を滅せしめて、わが感情をじて崇拜せしむるにいたるその根本的矛盾を精確に說明することを予に論證す。あらゆるものを統一に歸せしむることは生命の王國を死の領土に變ずることなり。予に於いては爾來長く「同一哲學」(Philosophy of identity)とよばるるもの、即ちあらゆる事物をその論理的根據に溯らせて、吾人の意識に於いて并びに歷史に於いて、それらの事物の有する暫時の發展を全然了解し難く、かつ無用なるものとしたる抽象的辯證法を否認したり。パスカルによつて觀察せられし、吾人が道德的生命の裡なる苦しき矛盾と、カントによりてあばかれし、吾人の思想裡の解決すべからざる反律とは、つねに予をして、プラトオン、スピノオザ及びヘエゲルの本體論的演繹法よりも、一層深く事物の根柢に行かしむるものの如く思はる。

この書に於いて、予は自己に於いてかつ自己によつて確かにせられたる事

實以外に何事をも記載しえざりき。予は實に世の凡ての思慮ふかき讀者は、いづれもそれらの事實を己れ自らの個人的經驗のうちに發見し、かつたどりゆきうべき事を思ふ。わが書を自己の衷に再讀することをえ。かつそを切に願ひ、而してかくの如くにして予の研究を確かむる人人は、思ふにこの書より若干の利益を得べし。然らずして予が書をよむ人は、ただにその時とその勞とを失ふのみならず、彼らはわが語句の意味、及びわが觀念の方向を一つ一つに誤解すべく、わが推理やわが觀念のもとに、予のものとは異る他の觀念や企圖をおくなるべし。而して彼らはそれより後、少しも良心にとがめらるることなきもの如く、それらのものより、最も恐しき結論を導き出だすやも知るべからず。凡そ哲學的の言語は、あらゆるものに自己を貸し、あらゆるものを受け容る。而してその災はこれらの爭を防がむと望むも無益なるべきことにあり。新らしき說明はただ新らしき誤解を生ぜしむるのみ。而して唯利益もなき爭をつづけしむるに甲斐あるのみ。吾人は唯アラビアなる古聖賢らの言を反復しうるのみ。曰く『眞理は大なりまた打勝つべし。』(Magna est veritas et praevalebit)と。

附錄

畢

批評に答ふ

明治四十年六月九日印刷
明治四十年六月十二日發行

宗教哲學概論
定價金壹圓三十錢

譯者　波多野精一
譯者　村岡典嗣
發行者　內田淺
東京市日本橋區大傳馬町二丁目十六番地
印刷者　藤本兼吉
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

複製不許

發行所
東京市日本橋區大傳馬町二丁目十六番地
內田老鶴圃
電話浪花千三百三十五番

324
41

013635−000−6

324−41

宗教哲学概論

ルイ・オウギュスト・サバティエ/著

M40

ABA−0104